石川県立美術館だより

BIJUTSUKAN DAYORI

第456号　令和3年10月1日発行

壺中日月長 大樋陶冶斎のまなざし

第68回 日本伝統工芸展 金沢展

大樋年朗《黒陶「夢見る童」飾壺》2014年　大樋美術館蔵
―企画展「壺中日月長　大樋陶冶斎のまなざし」より―

高松宮記念賞《木芯桐塑和紙貼「蒼天」》高田和司（石川）
―「第68回日本伝統工芸展金沢展」より―

オールドノリタケ×若林コレクション
アールヌーヴォーからアールデコに咲いたデザイン

百工比照【前田育徳会尊經閣文庫分館　特別陳列】

古九谷と再興九谷Ⅱ【古美術】

優品選【近現代絵画・彫刻】

- 〔展覧会回顧〕加賀百万石　文武の誉れ―歴史と継承―
- 〔企画展Topics〕うるはしきもの めでたきわざ―北陸の芸術院会員・人間国宝―
- 〔ミュージアムレポート〕キッズ・プログラム体験講座「はじめてのうるし」
- 学芸室の人々
- 10月の行事予定

企画展（第5・6展示室）

壺中日月長（こちゅうじつげつながし） 大樋陶冶斎のまなざし

主催／石川県立美術館　共催／北國新聞社
後援／北陸放送、石川テレビ放送、テレビ金沢、北陸朝日放送
特別協力／大樋美術館

9月18日（土）～10月17日（日）　会期中無休

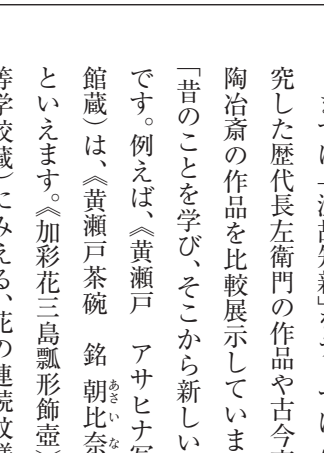
本展覧会は、大樋陶冶斎の作陶に向けるまなざしを三つの視点から紹介しています。

まずは、「温故知新」をテーマに、作陶するうえで研究した歴代長左衛門の作品や古今東西のやきものと陶冶斎の作品を比較展示しています。「温故知新」は「昔のことを学び、そこから新しい知見を得る」ことです。例えば、《黄瀬戸　アサヒナ写茶盌》（大樋美術館蔵）は、《黄瀬戸茶碗　銘　朝比奈（あさいな）》を研究した成果といえます。《加彩花三島瓢形飾壺》（石川県立工業高等学校蔵）にみえる、花の連続紋様を全体に巡らす「花三島」は、古い三島手の茶碗から創作のヒントを得た作品です。

そして二つ目は、《黒釉茶盌　銘　汲古（きゅうこ）》（当館蔵）を中心に据えた茶席仕立の展示です。「汲古」とは、「温故知新」と同義で、さらに人との出会いを大切にするという意味もあります。さて、どのような席になっているのか、ぜひご覧ください。

最後は、「飾りの妙」と題して、陶冶斎独自の造形や独特の装飾を持つオブジェ作品を紹介しながら「作陶の軌跡」もたどります。例えば《吹墨飾りのある花器》（一般財団法人草月会蔵）は、口縁部に抽象化された魚のような装飾が施され、能登呉須で色つけされています。また、幾何学紋を装飾として用いる《緑釉・丸壺に幾何紋》（大樋美術館蔵）、自由な造形感覚を持つ作品で、みる人により解釈の異なる《天目釉「花容」》などを紹介します。

幅広い作域を持ち、多様な造形をもつ陶冶斎芸術の世界を存分にご堪能ください。



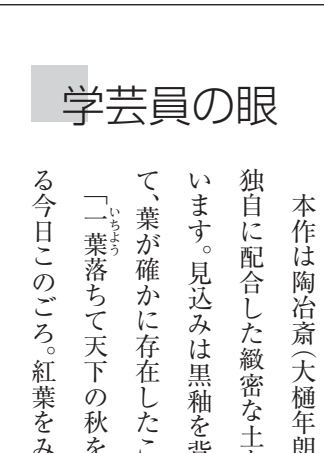
大樋陶冶斎《緑釉・丸壺に幾何紋》
2016年　大樋美術館蔵

学芸員の眼

大樋焼の茶盌（ちゃわん）といえば、手びねり・輪積み成形で篦（へら）削り、艶やかな飴釉がかけられたものが想起されますが、今回はあえて、陶冶斎が中国・南宋時代の吉州窯でつくられた木の葉天目を範とした茶盌を紹介します。

本作は陶冶斎（大樋年朗）により、三年以上試行錯誤を繰り返して完成させたもの。木の葉天目用に独自に配合した緻密な土を、平茶碗形に成形し、高台は小さく、口縁部も薄づくりで鋭利な姿をしています。見込みは黒釉を背に、ムクの葉が葉脈までくっきりと浮かび、葉柄の部分は少し盛り上がって、葉が確かに存在したことがわかります。

「一葉（いちよう）落ちて天下の秋を知る」。学者で茶人であった田山方南により銘がつけられました。秋も深まる今日このごろ。紅葉をみながら、この茶盌で一服を味わいたいものです。



大樋年朗《木乃葉天目茶盌　銘　一葉落知天下秋》
1975年　大樋美術館蔵

第7・8・9展示室

第68回 日本伝統工芸展 金沢展

主催／石川県教育委員会、日本放送協会金沢放送局、朝日新聞社、北國新聞社、公益財団法人 日本工芸会
後援／富山県教育委員会、福井県教育委員会

10月23日（土）～11月3日（水・祝）　会期中無休
※最終日11月3日のみ17時終了

◆観覧料

	個　人	団体（20名以上）
一　般	700円	600円
大学生	400円	300円
高校生以下	無料	

※65歳以上、当館友の会会員は団体料金

我が国は、四季の気候条件に恵まれ、多様な自然環境を形成しています。その中で、各地の風土に根ざした工芸品が生み出され、伝統技術を大切に継承し発展させてきました。日本伝統工芸展は、この優れた伝統技術の保護と後継者の育成、ならびに伝統工芸に対する普及を目的として、毎年開催されるものです。

日本伝統工芸展は本年で六十八回目を迎えます。陶芸・染織・漆芸・金工・木竹工・人形・諸工芸（七宝・ガラス・截金など）の七部門の入選作品五六〇点（遺作一点を含む）の中から、受賞作および重要無形文化財保持者（人間国宝）・特待者・鑑審査委員受賞者の作品、石川・富山・福井の作家の入選作品を含め、約三二〇点を展示します。

人形部門では、高田和司氏が《木芯桐塑和紙貼「蒼天」》で高松宮記念賞を受賞しました。高田氏は、本展には令和元年度に初入選しており、今回初受賞となります。

漆芸部門では、水口咲氏が《乾漆箱「新雪」》でＮＨＫ会長賞を受賞しました。人間国宝・小森邦衛氏に師事し、やわらかな肌合いの塗立について研究を重ね、第六十二回で初受賞、今回二度目の受賞となります。また、同じく漆芸部門で富山県からしんたにひとみ氏が《乾漆銀平文はちす箱》で朝日新聞社賞を受賞しました。しんたに氏も第六十五回で初受賞、今回二度目の受賞となります。

今回石川県の入選者は六十名、県別の入選者数としては全国一です。本稿で紹介した受賞者以外にも、県内外の工芸作家が受け継がれた技術を研鑽し、作品を発表しています。時を超えた名品が生まれる、伝統工芸最高水準の公募展を、本年度もどうぞお楽しみください。

※ 最終日十一月三日は十七時で終了します。

NHK会長賞《乾漆箱「新雪」》水口咲（石川）

朝日新聞社賞《乾漆銀平文はちす箱》しんたにひとみ（富山）

◆記念講演会

演題　「無形文化財としての工芸の意義」
講師　山崎 剛氏
（金沢美術工芸大学 学長）
日時　十月三十一日（日）
午後一時三十分～
会場　美術館ホール

＊事前申し込み制（メール、ＦＡＸのみ）
氏名（よみがな）、住所、電話番号、メールアドレス（またはＦＡＸ番号）を記載の上、メール（bunkazai@pref.ishikawa.lg.jp）またはＦＡＸ０７６－２２５－１８４３までご応募ください。（申込締切：十月二十四日（日））
申し込み多数の場合抽選となります。結果はメールまたはＦＡＸにてお知らせします。

企画展（第7～9展示室）
オールドノリタケ×若林コレクション
アールヌーヴォーからアールデコに咲いたデザイン

主催／北陸中日新聞、石川テレビ放送、石川県立美術館
後援／石川県、金沢市、金沢市教育委員会、NHK金沢放送局、エフエム石川
特別協賛／東海東京証券

9月18日（土）～10月17日（日）　会期中無休

本展は、日本屈指のオールドノリタケコレクションである若林コレクションから、陶磁器はもちろんデザイン画も含め優品約一五〇件を紹介するものです。

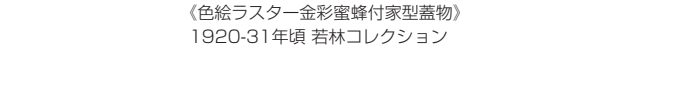
若林コレクションは、明治中期～大正時代の贅を尽くした装飾品、および一九二〇年代頃に製造された「ノリタケ・アールデコ」と呼ばれる作品が多くを占めています。装飾性の高さと、大衆向けのかわいらしさが併存しているオールドノリタケの作品たちの洗練されたデザインは、現代の私たちの眼にも新鮮に映ります。幅広いラインナップのなかから、自宅に飾るならこれ！と選びながら鑑賞するのも一つの楽しみ方かもしれません。

また、多種多様な器種、意匠、技法も見どころの一つです。本展では「モチーフ（題材）」「スタイル（流行）」「テクニック（技術）」「ファンクション（用途）」の四つの観点に分け、その魅力に迫ります。動植物や風景などの絵柄の多彩さや、装飾技法に焦点を当て、「盛上」や「金盛」などの技法も紹介します。野菜スティック用の容器などの珍品も集めており、その多様性を楽しめます。

コレクションの全貌を異なる角度から紐解く本展では、国際化の時代にあって独自の表現を花開かせたオールドノリタケの多様性を存分に感じていただけることでしょう。

◆観覧料

一般：一〇〇〇円（八〇〇円）
高校・大学生：八〇〇円（六〇〇円）
小・中学生：五〇〇円（三〇〇円）
未就学児：無料
※（　）内は前売り・20名以上の団体料金



《色絵ラスター金彩蜜蜂付家型蓋物》
1920-31年頃 若林コレクション

前田育徳会尊経閣文庫分館
特別陳列
百工比照

9月18日（土）～10月17日（日）　会期中無休

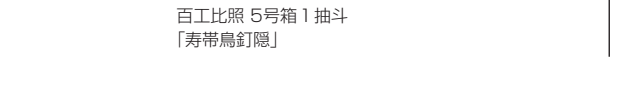
「百工」との字のごとく、ありとあらゆる工芸の材質を「比」べ、「照」らし合わせた集大成が、「百工比照」です。十以上もの箪笥（箱）に納められています。今回は展示中の第一号箱、第三号箱、第五号箱、第六号箱、第七号箱、第八号箱を紹介します。

第一号箱には、日本各地の和紙を、奉書・杉原など更に細かく分類した「紙類」（第一架）と、多様な唐紙を集めた「貼付唐紙類」（第二架）をはじめ、さまざまな金属を比べた「金色類」（第六架）、木材を揃えた「木之類」（第七、八架）、前号にて紹介した「蒔絵梨子地塗色類」（第九架）と「色漆類」（第十架）、紐類を集めた「打糸類」（第十四架）が納められています。

第三号箱以下は、「金具類」です。「小松芦島（小松城）」「江戸下屋敷」において実際に使用されていた縁飾金具・釘隠・戸金具・引手・つまみ金具などが並びます。小さな金具にまで豊かな造形を求め、その細部に施された象嵌による細かな模様が目を引きます。

第五号箱も小松城で使用したと思われる釘隠や引手金具類ですが、第三号箱の金具類より大きなものになります。花をくわえた優美な寿帯鳥は、打出金銀と鋳金の技法でつくられており、嘴と足には朱漆が用いられています。

第六号箱は籠形の釘隠が揃います。籠の中をのぞくと、それぞれ姿の異なる鳥や、色鮮やかな蟬・かまきり・蝶が見えます。ひとつひとつ異なる鮮やかな花籠の数々もご鑑賞ください。



百工比照 5号箱1抽斗
「寿帯鳥釘隠」

古美術（第2展示室）

古九谷と再興九谷Ⅱ

9月18日（土）～10月17日（日）　会期中無休

古九谷が生産されていた時期は、一六四〇年代から約半世紀と考えられます。資料から開窯を一六五五年頃とする意見もありますが、窯の整備には相当な年月を要すると考えられることから、一六五五年には本格的な生産体制が確立していたと解釈するのが自然ではないかと思います。前号で、一六六〇年以降に古九谷の質的転換があったと述べましたが、一六九五年には、もはや安定的な色絵磁器の生産がなされていなかったのではないかと考えられます。

その根拠となるのが、『前田貞親覚書』にある、将軍綱吉の母桂昌院に献上する御室焼香合についての同年八月の記録です。加賀藩五代藩主・前田綱紀の意向により、献上する香合は野々村仁清に発注されましたが、その出来具合は綱紀を失望させるものだったようです。そして同書には〝（裏千家四代の）仙叟宗室も、仁清は二代目になって下手になったと言っている〟との記述があります。それから約二ヶ月後に綱紀は御室焼を見限り、伊万里に茶碗、皿、鉢類を発注しています。したがって、この時既に九谷では芸術的完成度の高い色絵は生産できなかったと判断されます。

加賀ではこのように、陶磁器類を京都や九州に発注する慣行が以後百年余り継続しました。これが大量の藩金を藩外に流出させていたため、その抑止策として、大消費地の金沢で生産することが喫緊の課題となりました。こうして最初の再興九谷である春日山窯が誕生しました。

《色絵唐人物図鉢》春日山窯

近現代絵画・彫刻（第3・4展示室）

優品選

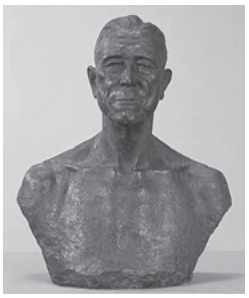
9月18日（土）～10月17日（日）　会期中無休

企画展「壺中日月長－大樋陶冶斎のまなざし－」を第5・6展示室で開催している関係から、第3展示室で洋画、版画と一緒に日本画を展示します。上田珪草《チーター》は、月明かりに浮かぶ四頭のチーターの姿がなんとも精悍です。好んで動物をテーマとした作者の作品でも、抜きんでた存在感を示しています。

油彩分野では、引き続き幻想的な作品を多く展示します。六反田英一《夢見る刻》は、第七十二回二紀展で田村賞を受賞した作品です。人物画を多く手がける作者は、構成された人物をいかに自然に表現できるかを考え、また物語性がありながらも純粋に絵画として成立させることを目指し、制作していると言います。

版画部門では光と闇の静寂な空気を表現する吉村佳映「坂道」の作品を紹介します。吉村の作品は水彩画に似た表情を生み出す銅版画の腐蝕技法、アクアチントの作品です。吉村はアクアチントの特徴である、線だけでは表現できない柔らかい闇の粒子の階調を自分の表現として追求しています。言葉では表現しがたい吉村の詩情の世界をご覧下さい。

彫刻分野では、第4展示室で引き続き「没後50年木村珪二」を開催しています。また、展示室そばの通路展示は作品入替を行い、九月から新しくなりました。重田照雄《アルゴン溶接による試作》、長谷川大治郎《精なるものへ　鳥・手・家・大地》、山下晴子《SLIDE No.5》。素材の質感やかたちの面白さをお楽しみいただける三点です。



木村珪二《ねんりん》

展覧会回顧

加賀百万石　文武の誉れ

―歴史と継承―

本展は、文武に際立った加賀藩主・前田家所縁の刀剣、書跡・典籍などの国宝をはじめ、「百万石」の自負と気概のもとに、明治時代以降に石川県で収集された茶道美術の名品、そして高山右近ゆかりの地として、キリシタンの記憶を今日に伝える文化財もあわせて展示して、本県の文化的アイデンティティーを歴史と継承の観点から広く発信することを趣旨として開催されました。

展覧会のタイトルから、「文」の章を最初にすべきかとも考えましたが、今回は「武」を第一章としました。足利将軍家に倣って、豊臣秀吉が名物刀剣の所持によって自身を権威付けた手法は、徳川家康にも継承されました。《刀絵図》から、天下三作の吉光、正宗、義弘を意識した展示構成は、歴代藩主所用の趣向を凝らした甲冑とともに、前田家の歴史的な位置付けを雄弁に物語っていたと思います。

こうした「武」の展示によって、名品の収集や工芸の振興などの、前田家による文化政策が持つ戦略的な側面が顕在化し、「百万石」をタイトルとした展覧会ではおなじみの書跡・典籍や絵画、茶道美術といった「文」の名品を、これまでとは違った雰囲気の中で展示することができました。そして、江戸幕府への対抗意識を鮮明に打ち出した前田家は、高山右近を客将として迎えており、幕府が禁止したキリスト教信仰にどのような姿勢で臨んだかについても展望し、好評をいただきました。

コロナ禍により、会期を九日間残しての終了となりましたが、本展は、当館の使命を改めて知っていただく契機となったのではないでしょうか。

（会期：令和3年7月10日（土）～8月8日（日・祝）
※7月31日（土）より休館）

企画展Topics

うるはしきもの めでたきわざ

―北陸の芸術院会員・人間国宝―

11月7日（日）～12月5日（日）　会期中無休

日本伝統工芸展金沢展終了後の十一月七日から開催する、今年度秋季企画展「うるはしきもの　めでたきわざ」展は、石川・富山・福井の北陸三県に生まれた、工芸部門の芸術院会員と人間国宝三十五名の作品を、一堂に会する展覧会です。

出品作家は、陶芸作家六名、漆芸作家十二名、染織作家三名、金工作家六名、木工芸作家三名、諸工芸の截金作家と手漉和紙作家各一名と、多岐にわたっています。江戸時代に加賀藩前田家が、文化政策を重んじたことにより、近代に入っても職人たちが制作を続けるための土壌が育っていました。さらに東京や京都など文化の中心的な都市から、比較的アクセスが良いこと、また緑が豊かで水が澄み、一年を通じて湿度が高く、寒暖の差が大きい北陸という地域が、工芸作品の制作に適していたことなど、いくつもの条件が重なり、多くの作家が競って制作を行う土地となったと言えるでしょう。

本展では各作家の芸術院会員就任年および、人間国宝認定年順に、各作家二～三点、計百点余りの作品をご紹介します。代表作とされる作品を中心に、展示室三室の内、二室目の後半から三室目にかけては、現存作家が多いことから、可能な限り近年の作品を入れました。平成十五年（二〇〇三）年の企画展「北陸の人間国宝」展の開催後、芸術院会員は一名、人間国宝は七名増えています。めでたき（抜きんでて優れた）わざによる、うるはしきものたちをお楽しみください。

蓮田修吾郎《森の鳴動》日本芸術院蔵

ミュージアムレポート

キッズ・プログラム体験講座「はじめてのうるし」

コレクション展「夏休み 親子で楽しむ美術館」の今年のテーマは「はじめての工芸」でした。伝統工芸について学び始めた小学生のお子さんや、実は工芸のことをよく知らないという大人の方向けに、工程見本などとともにわかりやすく工芸をご紹介する展示内容でした。

本展示の関連イベントとして体験講座「はじめてのうるし」を開催しました。まずは展示室で「はじめての工芸」を学芸員の解説のもと鑑賞し、講義室に移動して蒔絵体験を行いました。漆作家の名雪園代氏を講師に迎え、小皿に蒔絵でワンポイントの模様を施す体験です。感染症対策を講じたうえ、小学校1年生から6年生までの親子10組22名の方にご参加いただきました。今回は蒔絵の工程を学んでいただくために、置き目という下書きを漆で器面に写し取る工程を入れたので、少し難しくなってしまったと思いますが、みなさん思い思いのデザインを楽しみながら完成させることができました。

（開催：7月28日（水））

学芸室の人々

西 ゆう子（普及課 担当課長）

令和二年度に二十年以上勤務しました中学校現場より異動してまいりました。普及課では広報に関することも中心に担当しております。多感な中学生と活発に動き回って奮闘と感動の日々でしたが、その中でも「いかにみんなに解りやすく伝えるか」を思って接していたことが現在も生かせていると嬉しいのですが。そんな私の楽しみは、元気いっぱいホールやライブハウスなどで身体中で音楽を聴くことなのですが、世の中の状況から直接現場で聴くことは難しく、もうずいぶん長い時間画面上だけの楽しみとなっております。そんな私より日々心穏やかに、いや心躍るたくさんの作品からのなにかを皆様に届けていければと思っております。

10月の行事予定

■土曜講座　13時30分～15時　美術館ホールにて　無料

9日（土）	「大樋陶冶斎と古陶」　学芸主任　奈良竜一
16日（土）	「版画の技法」　普及課長　深山千尋
■ダンス・ウェルー彫刻とともに【延期しました】	
3日（日）	午前：10時30分～11時30分 午後：13時30分～14時30分 ＊終了後アフタートークあり（30分程度） 対象：年齢やダンス経験の有無に関わらず、どなたでも 会場：当館 第4展示室　定員：午前／午後各15名（先着順） 料金：無料（観覧券不要） ※申込方法など詳細は当館ウェブサイトをご覧いただくか、お問合せください

※日時や定員等を変更、または中止する場合がございます。
最新情報は当館公式ウェブサイトをご確認ください。

うるはしきもの　めでたきわざ

企画展Topics

会期：令和3年11月7日(日)～12月5日(日)

灰外達夫《神代楡挽曲造食籠》
文化庁蔵

松田権六《赤とんぼ蒔絵飾箱》
京都国立近代美術館蔵

木村雨山《友禅訪問着「梅林」》
女子美術大学美術館蔵

隅谷正峯《太刀》画像
白山市立博物館提供・大志摩洋一（おおしますたじお）撮影

武腰敏昭《無鉛釉空の王者》
能美市九谷焼美術館・五彩館蔵

三谷吾一《海の詩》
石川県立美術館蔵

西出大三《木彫截金彩色「飾馬」》
石川県立美術館蔵

次回の展覧会

令和3年10月23日(土)
～12月5日(日)

前田育徳会尊經閣文庫分館	第2展示室
中国憧憬 ―周文の《山水図》と唐物―	石川の文化財 ―国宝・重文・県文・市文―

第3・6展示室	第4展示室	第5展示室	1F企画展示室
優品選 【近現代絵画・彫刻】	REFLECTION ―光の記憶― 松崎十朗展	優品選Ⅰ 【近現代工芸】	うるはしきもの めでたきわざ ―北陸の芸術院会員・人間国宝― 〔11/7～12/5〕

ご利用案内

コレクション展観覧料
一　般　370円(290円)
大学生　290円(230円)
高校生以下　無料
※(　　)内は団体料金
10月4日は第1月曜により
コレクション展示室無料の日

10月の開館時間
午前9:30～午後6:00

カフェ営業時間
午前10:00～午後6:00 年中無休

10月の休館日は
18日(月)～22日(金)

広告
「石川県立美術館だより」に広告を掲載しませんか？
石川県立美術館友の会会員、石川県立美術館協力者、県内各行政機関及び文化施設、全国の美術館・博物館へ
郵送配布!! 3,000部発行
ターゲットを狙った 知名度向上
県立美術館発行の 信頼度の高い広報媒体
お問い合わせは ☎092-716-1401
株式会社ポープ
福岡県福岡市中央区薬院1-14-5MG薬院ビル7F
東京証券取引所マザーズ上場 福岡証券取引所Q－Board上場 財源確保 検索

石川県立美術館だより
第456号(毎月発行)
2021年10月1日発行
〒920-0963
金沢市出羽町2番1号
Tel:076(231)7580
Fax:076(224)9550
URL http://www.ishibi.pref.ishikawa.jp/

石川県立美術館は電源立地地域対策交付金を活用して運営しています。